

## 第三回定期大会シンポジウム

## インディヘニスモ

## ——原住民復権の思想と運動をめぐって——

## 報告 ペルーインディヘニスモの形成と展開

## ——1920年代インディヘニスモ論争

## をめぐって——\*

辻 豊 治\*\*

Toyoharu Tsuji

## I. はじめに——問題の所在

ペルーの1920年代は「原住民問題」がさまざまな立場から議論された、インディヘニスモの高揚期にあたる。またこの20年代は、19世紀末における帝国主義の展開とその下でのペルー資本主義の形成により社会経済構造および階級構造が大きく変動し、まさに帝国主義、資本主義をめぐってペルー社会の改革が正面から論議された時期でもある。この二つの現象はいかに関連してくるか。この設問はむしろ次のように言い換えられねばならない。ペルーにおける資本主義の展開過程において、原住民はいかに位置づけられるか——これが1920年代インディヘニスモ論争の核心である。つまり、1920年代インディヘ

\* 本稿は1982年6月6日第3回定期大会シンポジウム「インディヘニスモ——ラテンアメリカにおける原住民復権の思想と運動をめぐって」における報告「1920年代ペルーにおけるインディヘニスモ論争」を改題、加筆し、注を加えたものである。

\*\* 京都外国語大学(歴史学)

ニスモ論争とは、1920年代ペルーの社会変革をめぐる論争における重要な環なのである。

それでは「原住民問題」とは何であろうか。それは人口的次元におけるマジョリティと社会・政治・経済的次元におけるマイノリティである原住民の状況である。マリアテギが言うように「それは多数者の問題であり、国民形成に関わる問題である」<sup>(1)</sup>。この多数性 *mayoridad* と周縁性 *marginalidad* のギャップ<sup>(2)</sup>を問題として認識するところからインディヘニスモが生れてくる。

多数性を考える場合、原住民をいかなる基準によって分類するかが問題となるが、本稿ではこの点に深く立ち入らず、センサス(共同体成員を基準としての調査官あるいは徴税吏の判断にもとづく<sup>(3)</sup>)および言語を基準とする人口比率を次に掲げておく。

表. 原住民の人口比率

年 度	ペルー全人口	原住民人口	比 率 (%)	分 類 基 準
1876 a.	2,699,106	1,554,682	57.6	センサス
1925 b.	375万	185万	49	不 明
1940 c.	6,207,967	2,847,196	45.9	センサス
現在(1978) d.	1800万	820~1050万*	46~58	言語(ケチュア語)
現在(1981) e.	1800万	900万**	50	言語(ケチュア語)

\* その他ケチュア語以外の土着言語生活者が約22万存在する。

\*\* うちスペイン語との二重言語生活者800万、共同体内居住者450万。

(出所) a. Kubler, *op. cit.*, p. 35.

b. William Edward Dunn, *Peru: A Commercial and Industrial Handbook* (Washington, D. C.: Government Printing Office, 1925), p. 19.

c. Eugenio Chang Rodríguez, *La literatura política de González Prada, Mariátegui y Haya de la Torre*(México: Andrea, 1957), p. 301.

d. Nemesio J. Rodríguez y Edith A. Soubié, "La población indígena actual en América Latina," *Nueva Antropología*, Año III, No. 9, (1978), pp. 49-66.

e. José Matos Mar, *El Perú en la década de 1980*, 1981年11月18日, 東京本郷学士会館分館における講演。

周縁性に関しては次の二つの認識が存在する。一つはコスタ(沿岸部)—シエラ(山岳部)二重社会論にみられるように、ペルー国民生活からの原住民の社会的、経済的分離・隔絶<sup>(4)</sup>、一つはラティフンディスモに象徴される貧困・搾取・支配のもとにおかれている原住民の従属状況<sup>(5)</sup>、である。前者からは近

代・資本主義部門であるコスタへのシエラ(=原住民)の「統合」が、後者からは従属状況の廃絶=構造「変革」の立場が導き出される。本稿では相違点を明確にするため、この「統合」と「変革」を軸にして1920年代インディヘニスモ論争を整理していくことにする。つまり、一方は、ペルー資本主義発展の前提である国内統合の不可欠の要件としての原住民の統合をめざす、上からのインディヘニスモ、他方は、社会変革のプログラムのなかに原住民を位置づけていく立場、この両者の対抗としてみていくのである。

以下、本文では、Ⅱにおいて1920年以前の先駆的なインディヘニスモの流れを概観し、Ⅲにおいて20年代インディヘニスモを扱う。

## Ⅱ. 初期インディヘニスモ

一般にペルーの社会、経済、文化的構造はコスターシエラ、つまり前者の近代的、西欧的、資本主義的性格に対する、後者の後進的、原住民的、封建的性格の対照性・二重性とその大きな特徴として指摘されている<sup>(6)</sup>。各地域の中心がリマとクスコである。この二都市は各々固有のインディヘニスモを発展させた。その特徴を一言でいえば、リマにおける観念性・理論性・政治性、クスコにおける日常性・現実性・実証性ということになる。しかし両者のインディヘニスモは必ずしも対立するものではなく、交流しあい、補完しあいながらクスコの現実をリマで醸成し、普遍化するという形で統一的なペルーインディヘニスモが形成されていったと考えることができよう<sup>(7)</sup>。

### 1. リマ派インディヘニスモ<sup>(8)</sup>

独立以降の原住民擁護の流れを簡単にみていくと、1848年アレステギ Narciso Aréstegui が小説『El Padre Horán』において原住民貢納による重圧を描き、以後原住民擁護がペルー小説の重要なテーマの一つとなった。彼はまた1867年、リマにおいてブスタマンテ<sup>(9)</sup> Juan Bustamante とともに原住民友愛協会 Sociedad Amigos de los Indios を設立している。その後、1888年トレス・ララ José Torres Lara が『La trinidad del indio o costumbres del interior』

のなかで原住民迫害の三位一体として司祭、行政官、判事を告発した。同じ主題はマット・デ・トゥルネル Clorinda Matto de Turner の『Aves sin nido』(1889年)に引き継がれた。一連の文学による告発は人道的な立場からのものであり、「まだ原住民問題は経済的な次元で提起されていない」<sup>(10)</sup>。初めてより全体的な観点から、ペルーの社会経済構造との関連で原住民問題をとりあげたのはゴンサレス・プラダ Manuel González Prada であった。彼は『Horas de lucha』(1908年)のなかで次のように述べている。

共和制に変わっても強制労働、徴兵制など原住民の負担は変わらず、法の外におかれている、「確かにコスタにおいては共和制の擬制のもとにわずかな保証が認められているが、内陸においてはまぎれもない封建制のもとであらゆる権利が蹂躪されている」<sup>(11)</sup>。このように原住民を無知と搾取のもとにおくガモナル(地主をはじめ官僚、買弁、寄生者などの伝統的支配層)支配体制においては「原住民問題は教育問題である以上に経済的、社会的問題である」<sup>(12)</sup>。

これより以前の1888年7月28日、彼は太平洋戦争によってチリに奪われたタクナ、アリカ地域回復の義捐金集めの集会において、敗戦の原因としてペルーの後進性(国民全体の奴隷根性と無知)と国民統合の欠如を指摘し、それを克服する手段として科学と自由を礼賛した。自由こそ強靱な人間の母胎であり、とくに「寄るべなき原住民」にとって必要であるとして、次の有名な章句を発する。「真のペルーは……アンデス東斜面一帯に散在する原住民大衆が形成するのである」<sup>(13)</sup>。

ゴンサレス・プラダにおいては、科学と自由に象徴される近代化と国民統合への願望とその支柱としての原住民への期待が一体化していた。しかしいかなる構造への統合なのか。時代はまだ資本主義のとぼ口に立っていたにすぎない。「ペルーの社会変革のプログラムを構築する任務は、次代の後継者たちにゆだねられねばならなかった」<sup>(14)</sup>のである。

リマにおける原住民擁護の先駆的な組織的運動として『原住民擁護協会 Asociación Pro-Indígena』(1909~17年)が出現した。この協会は人道主義・博愛主義の立場から次のようなさまざまな思想、潮流の人々から構成されていた<sup>(15)</sup>。会長カペロ Joaquín Capelo(上院議員、ポジティブリスト)、事務局長スレン Pedro S. Zulen(社会主義者)、マイエル Dora Mayer de Zulen(ヒューマ

ニスト), モスタホ Francisco Mostajo(リベラリスト)等. 主な活動は次のようなものであった<sup>(16)</sup>.

- ① 世論, 公権力をつうじての原住民の復権・擁護——全国 46 郡に代表をおき<sup>(17)</sup>, 原住民に対する権利侵害を監視, 報告する体制を整え, その実態を世論に訴えて広報活動を展開する. そのために機関誌『El Deber Pro-Indigena』が発行された.
- ② ガモナルとの紛争事件における原住民に対する無償の法廷弁護活動.
- ③ 原住民の社会的地位の向上のための研究活動——原住民立法の編纂等.

その他, 原住民の市民的権利の回復として無償教育, 結社の自由, 労働の自由(エンガンチェ制および無償労働の廃止), 土地に対する権利回復などを訴えた<sup>(18)</sup>. この協会の意義は原住民問題への認識を広め, 原住民擁護法の立法化に貢献したことであり, パサドレは「国民の良識の声」と評価している<sup>(19)</sup>. 一方マリアテギは, 協会の活動がガモナル体制の罪状を明らかにし, 擁護運動がコスタにおいて展開されたことを評価しながらも, その人道主義的, 博愛主義的な運動の限界性を指摘し, この実験の結果として逆に原住民問題の解決が社会的解決でなければならず, また原住民自身の手によらねばならないことを明らかにした, と述べている<sup>(20)</sup>.

## 2. クスコ派インディヘニスモ

### (1) クスコ大学改革(1909年世代の登場)

クスコ派インディヘニスモ形成の直接の契機は, 1909年におけるクスコ大学 Universidad San Antonio Abad del Cusco 改革であった. タマヨ・エレラによると 19世紀のクスコ大学の状況は次のようなものであった.

「時代遅れの教育, エリートのための教育, スコラ哲学・形而上学に終始する教養主義教育, 当時の現実と何の関わりも対立もない法学士の大量生産<sup>(21)</sup>」.

20世紀に入ってからこうした状況が続き, 1896年以来学長職にあったアラウホ Eliseo Araujo による大学の私物化, 情実主義, 学閥などの弊害がはびこり, 学生の間にも不満がつのっていった<sup>(22)</sup>. 1909年3月, 学内に学生連盟 Asociación Universitaria が組織され, 5月7日にストライキが宣言された. 南米における最初の大学ストである. この結果大学は閉鎖され, クスコに留っ

た学生達は学生連盟の機関誌『ラ・シエラ La Sierra』に依拠して、大学改革を主張していった。この学生のなかにバルカルセル Luis E. Valcárcel. アギラル Luis Felipe Aguilar, ベガ・エンリケス Angel Vega Enríquez, ウガルテ César Antonio Ugarte などがあり、後年、クスコ派インディヘニスモの中核を形成することになる。1910年3月大学は再開され、レギア政権(第1次, 1908~12年)の要請により新学長として30歳に満たないドイツ系米国人ギーゼケ Albert Giesecke が就任した<sup>(23)</sup>。この新学長のもとで大学の民主化, 近代化が着手された。その就任演説において交通手段としての鉄道の重要性とクスコの進歩と近代化が強調され<sup>(24)</sup>, 大学改革は地域さらには国家の現実にも目を開かせることとなった。新たに発刊された『大学紀要 Revista Universitaria』(1912年)と『ラ・シエラ』誌を中心にクスコ派が形成された。その主張は、バルカルセルによると次のようなものであった<sup>(25)</sup>。

- ① ガモナルの抑圧に対する原住民擁護
- ② 反中央集権
- ③ 国内におけるクスコの主導権の回復
- ④ 政治・経済・社会的地域主義
- ⑤ インカ帝国の称揚
- ⑥ 地域の実態および原住民共同体の調査研究

このようにクスコ派インディヘニスモは目前の現実である原住民の悲惨さと過去のインカの栄光との断層を認識するところから出発したといえよう。その依拠するところは過去にあり、現実はその過去から照射されるのである。したがって、タマヨ・エレラが言うように「クスコインディヘニスモの起源はまさに歴史学にある」<sup>(26)</sup>。クスコにおける歴史学, 考古学, 人類学の興隆は、1911年マチュピチュ遺跡の発見にも刺激され、ガルシア José Uriel García 『El arte incaico en el Cuzco』(1911年), バルカルセル 『Kon, Pachacamac, Uirakocha』(1912年), 『Del ayllu al Imperio』(1916年)など数多くの著作を生み出した。また、クスコ歴史研究所が設立され、その機関誌『ヌエストラ・イストリア Nuestra Historia』が1914年8月に創刊されている。

(2) 『原住民再興グループ Grupo Resurgimiento』の成立(1926年)

1920年代に入るとクスコ派インディヘニスモの著書の普及、クスコ選出議

員の議会活動、リマとの人的交流をつうじてインディヘニスモは地域性を次第に失っていき、ペルーインディヘニスモとも言うべき全国的な質をもつようになる<sup>(27)</sup>。しかしこの方向とは逆にもっともクスコの的な、ある意味ではその頂点とも言えるインディヘニスモ運動が生れている。これが『原住民再興グループ』(1926年11月26日～27年5月)である。その成立の直接的契機となったのはまさにクスコにおける原住民の現実であった。クスコ県カンチス郡における、県知事による原住民所有の家畜略奪事件、およびキスピカンチス郡のラウラマルカ農場と近隣共同体の境界紛争とそれにとまなう原住民の密林地帯への強制連行事件、グループの結成はこの二つの事件と密接な関わりをもっていた。グループの主要メンバーは、クスコ派の先駆者アギラル、ベガ・エンリケス1909年世代のバルカルセル(事実上の創立者)、ガルシア、コシオ Félix Cosio、第2世代のパレデス Luis Felipe Paredes、ベラスコ・アラゴン Luis Velazco Aragón、第3世代のルナ・パチェコ Julio Luna Pacheco(のちのクスコ・アプラの中心人物)、ラド Casiano Rado(事務局長、学生活動家)などクスコ派の精鋭が結集した<sup>(28)</sup>。そしてこの運動に対し、雑誌『アマウタ Amauta(インカ時代の「賢者」)』を舞台にマリアテギ José Carlos Mariátegui、セオアネ Manuel Seoane、メイエルなどがリマにおいて協力している。この『アマウタ』誌上(1927年1月)に掲載された「原住民再興グループ綱領」<sup>(29)</sup>はおよそ次のようなものであった。

- ① 原住民を不幸な弟として物質的、精神的に擁護する
- ② 原住民に対し「自己犠牲」「敬意」「誠実」「連帯」を原則とする
- ③～⑥ 以上の原則に立って、原住民との対話、その意識の覚醒、法廷闘争が可能であり、新しい民族主義・ヒューマニズムの基本となる。
- ⑦ 文明社会における特権、保証を原住民に広げていく
- ⑧ 自らの意識変革を実現しうる「新しい原住民」という思想を定式化する。

さらに当面の目標として19項目が掲げられている。主なものは、法廷、行政面での無償弁護活動、医療・社会保障の拡充、クスコにおける教育・宿泊施設の設置、会議におけるケチュア語使用、原住民音楽・舞踊の育成、アルコール中毒撲滅、文盲一掃、「原住民の日」の制定、原住民教育のための師範学校の設立などである。

しかしこのグループはわずか半年余りで崩壊した。バルカルセルは前述の二事件などのグループの介入が当局の弾圧を招いたことをその原因としてあげているが<sup>(30)</sup>、タマヨ・エレラは次のように分析している。「その目標は理想主義的、ロマンチックなものであったが、たぶんこのことがその急速な解体を説明している」<sup>(31)</sup>。またフランケも「原住民問題が道德および文化の問題に矮小化され……土地所有制度、ガモナル体制の政治・イデオロギー支配、農村を支配する半封建的関係の問題の基本的な原因を考慮しなかった」<sup>(32)</sup>点にその限界性を求めている。最後にマリアテギの評価をみておこう。彼は批判しながらも『アマウタ』誌をつうじてこの運動を側面から援助した。この点は彼とバルカルセルの関係を考える場合重要である。マリアテギは「綱領」が掲載されたのと同じ『アマウタ』(No. 5)に「原住民擁護新十字軍」<sup>(33)</sup>と題する評論を書いている。このなかで彼は、グループの成立の背景に原住民との連帯を考える人々との精神的、思想的結びつきがあると、その歴史的意義を認めている。しかしこのグループの提案のあいまいさを指摘し、原住民との連帯の単なる表明に止まっているとする。以前マリアテギは「原住民擁護協会」の解散について、その人道主義的限界を指摘したが、この「原住民再興グループ」にその再来をみ、「原住民擁護新十字軍」と呼んだ。マリアテギの予見はきわめて早い時期に適中したことになる。ペルーにおける現実とははや理想主義的な運動の存続を許さなかったのである。

### (3) クスコ派インディヘニスモの展開

さて、原住民再興グループの崩壊後、クスコ派インディヘニスモは三つの方向に分裂していく<sup>(34)</sup>。①「クントゥール・グループ grupo “Kuntur”(ケチュア語で「コンドル」の意味)②「ラ・シエラ派 La Sierra」③ 大学の象牙の塔あるいは文化活動への後退。

「クントゥール・グループ」は雑誌『クントゥール』に依拠するもっとも急進的なグループである。1927年5月末、再びクスコ大学においてレギア政権の抑圧政策を支持する教授、大学当局に対し、「アンデ・グループ grupo Ande」(1927年2月生まれたクスコのアブラ細胞<sup>(35)</sup>)の学生を中心にストが起り、約1年継続した。一方、クスコ派インディヘニスモの前衛として雑誌『コスコ Kosko(「クスコ」のケチュア語表記)』が1924年に創刊された。この雑誌には

1921年クスコにおけるペルー学生会議において創設が決定された「ゴンサレス・プラダ人民大学 Universidad Popular González-Prada」に依拠する学生、知識人、組合指導者やバルカルセル、ラド、ガルシアなどの「原住民再興グループ」が関係していた。「クントゥール・グループ」は「アンデ・グループ」と「コスコ」グループが統合されたものである。『クントゥール』誌は1927年10月創刊された。このグループは大学ストを擁護し、レギア政権のエセ・インディヘニスモ、雑誌『ラ・シエラ』の人種主義を批判し、原住民問題が基本的に経済的、政治的性格をもつこと、その根源は大土地所有とガモナル支配にあり、原住民と土地が不可分であることを主張し、労働者、農民、急進派学生の同盟による社会主義革命を提唱した<sup>(36)</sup>。1928年にはアブラと明確に一線を画し、のちにペルー共産党の重要な基盤となった<sup>(37)</sup>。

雑誌『ラ・シエラ』は1927年にリマで復刊された。主にクスコの右派のインディヘニスタと結びつき、アブラに近い立場をとった<sup>(38)</sup>。彼らにおいて原住民問題はペルーの全国的な文化の欠如に求められ、したがってその目標は真の国民文化の形成にあった。この役割を担うのがシエラの知識人である。雑誌の経営者であるゲバラ兄弟 J. Guillermo y Víctor J. Guevara はクスコの地主層の出身で、彼らの唱えるシエラ主義 serranismo はクスコに伝統的な地域主義の現われであった。フランケによると、その原住民問題に対する立場は反動的であり、反原住民的である<sup>(39)</sup>。

以上みてきたように「原住民再興グループ」の解体およびその後の過程は、原住民問題が地域的な枠に止まらずペルー社会の変化と密接な関わりをもち、リマにおける政治論争と連動するものであることを示している。

〔補論〕 プノ派インディヘニスモ<sup>(40)</sup>

リマ、クスコの2つのインディヘニスモの潮流の他に、プノを中心とするインディヘニスモ運動(プノ派)が存在する。この地域は原住民反乱の多発地域で、これがさらに1915年のルミマキの大反乱を誘発している。このような地域的背景から雑誌『ボレティオン・ティティカカ Boletín Titikaka』(1926~29年)に依拠する「オルコパタ・グループ grupo Orkopata(「絶壁」の意味のケチュア語)」が形成された。ベラルタ兄弟 Alejandro y Arturo Peralta を中心にチュラタ Gamaliel Churata, ママニ Inocencio Mamani などがいる。他にプノ出身のインディヘニスタとしてエンシナス José Antonio Encinas(教

育、法学)、ロメロ Emilio Romero(経済史)が重要である。

### Ⅲ. 1920年代インディヘニスマ論争 ——統合か変革か——

19世紀末においてコスタを中心に外国資本による資本主義企業が出現し、ペルー経済に大きな構造変化をもたらした。これは砂糖および綿花プランテーションによる輸出農産物加工が軸であった。20世紀に入るとさらに繊維工業、鉱業(銅、石油)が加わり、軽工業、食品加工業が国内需要向け工業として一定の発展を示した。これに伴って金融・保険、サービス部門、都市におけるインフラストラクチュア、輸出経済と結びついた輸送・通信設備(鉄道、道路、港湾設備、電信・電話)の整備・拡充が進んだ。このような状況を背景に1919年成立したレギア Augusto B. Leguía 政権はこの過程を一層促進することによって強力な近代的資本主義国家を建設することを歴史的任務とした<sup>(41)</sup>。このため英国に代わって新たにペルーの経済的宗主国となった米国に対し、資本、借款、技術、貿易のすべてにわたって結びつきを深めた。さらに国内的には、輸出経済および国内産業開発の観点から都市への食糧および労働力供給源、商品市場として農村(シエラ)の国民経済への統合が不可欠となった。レギア政権の原住民政策はこの近代化、国家統合政策との関連において検討されねばならない。

一方、経済構造の変化は階級構造における変化を生み出し、それはコスタを中心に労働者、中間階級の拡大となって現われた。こうしてコスタ北部の反帝闘争を背景に中間階級を軸とする民族主義運動すなわちアプラと、リマの労働組合運動と結びつく労働者政党すなわちペルー社会党が出現する。各々、帝国主義支配およびレギア政権に対して、社会変革を掲げて闘った。抑圧され、実質的にも人口の半分を占める原住民の存在をその変革のプログラムのなかにかに位置づけていくかはきわめて重要な課題であった。両勢力を代表するアヤ・デ・ラ・トーレ Víctor Raúl Haya de la Torre とマリアテギの社会変革に関する共通性と相違がそのまま原住民政策についてもあてはまると考えられ

る。本稿ではこの共通性を「変革のインディヘニスモ」として括り、両者の相違を各々「改良的インディヘニスモ」「革命的インディヘニスモ」と呼ぶこととした。 「変革のインディヘニスモ」は必然的にレギア政権の原住民政策(シェバリエはこれを官製インディヘニスモ official indigenismo と呼んでいる<sup>(42)</sup>)と対峙する。当時の原住民問題をめぐるこの対立を「1920年代インディヘニスモ論争」として、各々のインディヘニスモを比較、検討していきたい。

### 1. 統合のインディヘニスモ(官製インディヘニスモ)

まずレギア政権の対原住民政策を列挙してみよう。

- ① 20年憲法第58条による原住民共同体の公認
- ② 勸業省内に「原住民問題局 Sección de Asuntos Indígenas」の設置
- ③ 「原住民保護組織 Patronato de la Raza Indígena」の設置
- ④ 「原住民権利擁護委員会『タワンチンスーヨ』 Comité Pro-Derecho Indígena “Tahuantinsuyo”」に対する後援
- ⑤ 道路建設徴用令 Ley de Conscripción Vial の制定

レギア政権によって制定された1920年憲法は、メキシコ1917年憲法およびドイツワイマル憲法の影響を受けて労働者の団結権、最低賃金制を定め、当時としては進歩的な憲法であった。本稿との関連では第58条の原住民共同体に関する条項が重要である。

「国家は原住民を擁護し、その必要に応じて、その発展と文化のための特別法を公布する。国家は原住民共同体の法的存在を承認し、法はそれに相応する権利を宣言する」<sup>(43)</sup>。

この結果、ポリールバルの1824年トルヒーヨ宣言、1852年カスティーヤによる民法制定によって共同体所有が禁止され、単なる個人の集合とみなされてきた原住民共同体が再び法的にその存在を認められたのである。この憲法規定に基づき一連の原住民問題についての制度化がなされた。その一つは1921年の原住民問題局の設置であった。バルデラマとアルファヘメによるとその任務は次のとおりであった<sup>(44)</sup>。①所有、労働等の権利に関する原住民の訴えの受理、②原住民の状況調査、③紛争解決の法的措置、④原住民共同体の登録。初代局長にはヘルマン派<sup>(45)</sup>インディヘニスタ、カストロ・ポソ Hildebrando Castro

Pozo が就任した。1922年に設置された「原住民保護組織」は、リマの大司教が主宰する中央組織のもととくに紛争の激しいクスコ、プノ、アンカシュ等に県・郡レベルで司教が組織を統轄する。その役割は原住民問題局を補佐して、地域の原住民権利の擁護を図り、法的行政的措置をとることにある。また、「原住民権利擁護委員会『タワンチンスーヨ』」は政府が後援する原住民の自治組織である。そのもっとも重要な活動は各地域の共同体代表による原住民会議の召集である。1921～24年に計4回開催されたこの会議において、徴用令廃止、奪われた共有地の返還、無償労働の廃止、シエラにおける最低賃金制、原住民のための特別裁判所の設置などの反ガモナル、政府政策批判の決議が採択された。1920年に制定された道路建設徴用令は、ペルーに居住するすべての成人男子に半年に6日、道路建設、補修に従事するか一定の支払いを行なうかを義務づけたものである<sup>(46)</sup>。現実には居住地から遠く離れた場所での労働、地方バス、地主のもとでの労働などの強制を意味し、とくに原住民にとって大きな負担となった<sup>(47)</sup>。

以上のようにレギア政権の原住民政策は一見、原住民擁護を強く打ち出し、とくに南部では「ピラコチャ」(インカ時代の白い肌の神)の再来ともてはやされ、彼自身このように自称していた<sup>(48)</sup>。擁護立法の成立自体、原住民擁護協会の運動、クスコ派の議会活動、ヘルマン派の進出など一連のインディヘニスモ運動の成果であることは疑いない。しかしこれらのレギア政権による擁護立法・措置は、その資本主義的統合政策の枠内に限定されていた。したがって官製インディヘニスモが政府批判、体制批判に向かうときびしく弾圧され、解体されていった。原住民会議が徴用令廃止などの政策批判を決議するとこの機能を停止させ(第4回以降開かれず)、「委員会『タワンチンスーヨ』」自体も非合法化(27年)された。また原住民保護組織も地方官憲、裁判所と競合してほとんど機能を果さずに終わった<sup>(49)</sup>。原住民問題局長カストロ・ポソはその急進主義から1923年解任され、ヘルマン派自体レギア政権から一掃された。道路建設徴用令について、ディビス・Jr. は「オンセニオ(レギアの11年間の執政期)の間に公布された原住民擁護立法の意義の大部分は、レギアの道路建設徴用令として知られるプログラムの実施により無に帰した」<sup>(50)</sup>と述べている。鉄道とともに道路建設はシエラの農村をコスタの都市に結びつけ、地主が自ら

の生産物を都市に輸送することを容易にした。地主および行政当局が法令をつうじて原住民労働力を動員するという意味でこの徴用令は植民地時代の強制労働制度であるミタ制にたとえられている<sup>(51)</sup>。オンセニオ(1919~30年)に建設された道路は全長1万8069キロに達した<sup>(52)</sup>。

以上のようなレギア政権の官製インディヘニスモについて、バルデラマとアルファヘメはレギア政権の二面性として捉えた。

「(その政策は)国内市場の拡大およびより強大な国家装置の樹立という意味での、国家としてのペルーの発展を促進するという関心に示されていた。国内市場の拡大は、労働力および商品生産者・消費者としての原住民をできる限り〔国民〕経済へ統合することをめざし、それは伝統的・前資本制的構造をある程度俎上に乗せることを意味した」<sup>(53)</sup>。

つまりレギア政権の近代化政策がもつ原住民統合の側面と反ガモナルという意味での一定の進歩性である。また、原住民共同体の法人としての承認は、ある意味で労働力再生産の基盤としての共同体の維持を法的に保証するものであり、政府の原住民からの労働力、納税能力への依存および全体的な統合化政策と矛盾するものではなかった。このようにレギアの官製インディヘニスモは近代化統合政策の一環として位置づけられる。

## 2. 変革のインディヘニスモ

コスタ北部を中心とした外国資本の展開(糖業プランテーション、石油、銅山、鉄道)、米国経済と結びついたレギア政権の従属的開発政策と政治的抑圧政策に対抗して、中間階級、労働者、農民からなる階級同盟による変革のプログラムが1920年代前半に構想された。この潮流がアプリスモ *aprismo* である<sup>(54)</sup>。さらに20年代をつうじての政治・経済構造の変化のなかでアプリスモと袂を分かったマリアテギが1928年ペルー社会党 *Partido Socialista Peruano* を結成し、反政府運動は二つの勢力に分裂していく。ここでは両者の違いを簡単に指摘しておきたい。アプラは帝国主義を最大の敵とみなし、中間階級が指導する階級同盟のもとに反帝勢力を結集し、帝国主義に対抗しうる自立的近代国家の実現をめざす。一方、マリアテギは新興ブルジョアジーはもとより中間階級に対してもその反帝的性格を疑問視し、アプラ的な階級同盟に代わる労農

同盟による社会主義革命を志向する。この両者の図式は帝国主義の位置づけを軸に構想されている。帝国主義の展開がコスタという先進地域であってみれば、この地域の分析が革命プログラムの中軸になるのは当然としても、本稿が主題とする原住民問題の主舞台、シエラは両者においていかに認識されていたか。つまりシエラにおける伝統勢力(ガモナル)―原住民の関係が全体プログラムにおいていかに位置づけられているか。これが両者のインディヘニスモを検討する際の焦点となろう。

### (1) 改良的インディヘニスモ(アブラ・インディヘニスモ)

アブラのインディヘニスモを知るために、まずアヤの「原住民問題」<sup>(55)</sup>を検討しておこう。文中で原住民問題が何よりも経済問題であることを強調し、自らゴンサレス・プラダの直系であることを宣言している。そしてペルーにとって共同体こそ民族的なものであって、外来のラティフンディオとの抗争によってペルーの歴史が展開してきたとする。この点では原住民問題の核心がガモナル支配下の原住民として捉えられている。「ペルーおよび米州の原住民のためのわれわれの闘いは、ラティフンディオに対する闘いである」<sup>(56)</sup>。ところが「帝国主義と原住民」という魅惑的な一項を設け、帝国主義との関連に言及する。つまり帝国主義の進出は原料の獲得、市場確保、投資を動機とするが、不払労働、低賃金労働、商業的収奪をつうじて原住民が搾取されるというものである。この意味で、「米州諸国の敵、帝国主義は原住民の最大の敵」<sup>(57)</sup>なのである。こうして原住民に対してガモナルと帝国主義の同盟が二重の圧力をかけるのである。原田氏はこのアヤの認識を次のように分析する。「〈インディヘニスモと帝国主義論の融合〉にこそ、アヤの、雄弁と折衷主義という特性が顕著に表われている。…この図式から抜け落ちていく国内支配階級〔新興産業資本の意味―筆者〕を免罪してしまう」<sup>(58)</sup>。

つまり、アブラの国内分析は、コスタにおける帝国主義対中間階級＝労働者、およびシエラにおけるガモナル対原住民という関係において支配者相互および被支配者相互を各々同盟者として接合させ、そのうえでコスタにおける関係を支配的あるいは優越的とみるのである。これはコスタの分析のシエラへの横すべりを意味し、この点にアヤの生産力主義的な認識が看取され、「資本の文明化作用」への信仰がみられる。原住民は労働者に転化し解消されていくという

前提があるのである。ここに「インディヘニスモと反帝国主義の短絡」<sup>(59)</sup>が起る。以下にアブラの1931年における「当面の行動計画—国内綱領」<sup>(60)</sup>のなかの農業政策および原住民政策をみていこう。

「農業政策」<sup>(61)</sup>

- ① 国家による市場情報サービス
- ② 農民にたいする法的・経済的援助
- ③ 国内市場向け商品生産用の特定農地の有償収用
- ④ 借地契約の政治規則
- ⑤ 国家による集団農場と農業協同組合の振興および援助
- ⑥ 大農場の帳簿にたいする国家監査
- ⑦ 可耕地の遊休化にたいする課税
- ⑧ 灌漑システムと用水権の再編
- ⑨ 農業省の創設
- ⑩ 農業普及試験所の設置
- ⑪ 農作物補償制度の確立

「原住民政策」<sup>(62)</sup>

- ① 国民生活への原住民の統合
- ② 原住民共同体の維持およびその近代化のための立法措置
- ③ 原住民小所有(農・工)の奨励
- ④ 教育政策——原住民教師の養成, 原住民農業学校の設立, スペイン語・原住民言語併用の教育
- ⑤ 原住民土地所有農の農業協同組合への編入
- ⑥ アルコール, コカ撲滅キャンペーン

アブラの政策を検討するに当たって注意すべきことは、その現実主義、政権奪取に対する選挙闘争と一揆主義の使い分けにみられる政策の振幅の大きさである。このため個々の政策は全体プログラムのなかに位置づけることが必要となってくる。この点では原住民政策も例外ではない。前にもふれたようにアブラの全体プログラムは、アヤの帝国主義論の帰結として、「資本の文明化作用」をペルーの「自立的」資本主義に結びつけること、そしてこの戦略を主導するのが中間階級でありその政党であるアブラである、というものである。

以上の点からアブラの原住民政策は次のように特徴づけられよう。

- (A) アブラ運動はペルーの先進地域(コスタ)をその分析モデルとしており、シエラの原住民は二次的にしか位置づけられていない。
- (B) 原住民は中間階級によって指導される対象として把握されている。
- (C) アブラのインディヘニスモはコスタの自立的資本主義へのシエラ原住民の統合をめざしたものである。

(2) 革命的インディヘニスモ(社会主義インディヘニスモ)

マリアテギの原住民問題へのアプローチは過去のインディヘニスモへの反省、批判から出発する。『ペルー現実解釈に関する七つの試論』のなかの「原住民問題」<sup>(63)</sup>において、マリアテギは原住民問題の根源は何かと問い、従来さまざまなアプローチ<sup>(64)</sup>に検討を加える。

- ① 法律・行政的解決——植民地時代以来、擁護法が整備されてきたがほとんど実効はなかった。封建制が手つかずのままのガモナル体制のもとで法令はつねに形骸化されてきた。この構造を変えることなく自由主義的権利が行使しえることはありえない。
- ② 人種問題——原住民が劣等民族であるという考え方は、もっとも古くさい帝国主義的思想であり、反社会学的である。
- ③ 道徳的解決——人道的立場からの原住民擁護の実践では帝国主義を阻止することも善良化することもできない。
- ④ 宗教的解決——教会が権威と規律をもっていた昔にラス・カサス神父さえ果せなかった仕事を現代において成功させることはできない。
- ⑤ 教育的解決——教育は社会経済的環境と切り離して考えられない。したがって封建的圧力のもとでの教育はその本質を奪われ、無力化される。

以上のように各アプローチを否定し、原住民問題の基本が「土地問題」にあるとする。それは「原住民の無知、後進性、悲惨は隷従の結果以外のなにものでもない。封建的大土地所有が地主階級をつうじて原住民大衆の絶対的な搾取と支配を維持している」<sup>(65)</sup>からである。つまり、原住民問題の根源を「大農地における原住民に対する封建的搾取」<sup>(66)</sup>と捉える。したがって「原住民の復権とは土地の回復である」<sup>(67)</sup>。マリアテギはこの点を原住民問題の出発点とする。

マリアテギのペルー社会に関する分析を図式的に示せば<sup>(68)</sup>、コスタ—シエ

ラの二重性、帝国主義＝ブルジョアジー対労働者という関係図式、中間階級の動揺性、シエラにおける封建制下のガモナル対農民(原住民)、帝国主義支配とガモナル支配の断絶<sup>(69)</sup>、となろう。つまりコスタ、シエラ各々の個別の分析の必要性が意識されている。そして地域的に次のような解決案が提示されている。シエラにおける大所有地からの土地の回復による共同体の再生、コスタのヤナコナ(分益農)に対する土地権利の回復、およびコスタのペオン(農業労働者)に対する労働者としての権利回復である<sup>(70)</sup>。

このマリアテギの「共同体再生論」はアブラの「小農育成論」と対立する。マリアテギには単なる「小農の創設、ラティフンディオの収用、封建的特権の一掃は帝国主義の利害に反するものではない」<sup>(71)</sup>という認識があって、原住民共同体の消滅、つまり資本主義社会への統合が原住民問題の解決にはならないという考えをもっていた。ここから共同体の再生、社会主義的協同組合への転化の構想が生れてくる。つまり「〈共同体〉は……ペルーにおける土地の社会主義化のひとつの自然的要因であることを示している。原住民は協働の根強い慣行をもっている。……〈共同体〉は最小の努力によって協同組合に転化しうる」<sup>(72)</sup>。

このようなマリアテギの共同体評価には、バルカルセル<sup>(73)</sup>をはじめとするクスコ派のインカ理想国家論、アイユ(インカ時代の共同体)共産主義論、カストロ・ポソの原住民共同体の現状分析<sup>(74)</sup>、およびマルクスのロシア共同体評価<sup>(75)</sup>の影響が考えられる。

またマリアテギは「原住民問題の解決は……それを実現するのは原住民自身でなければならない」<sup>(76)</sup>と述べている。彼は共同体の集団意識と構造のなかに社会主義の基礎<sup>(77)</sup>とそれを支える自律性をみいだしたのである。

マリアテギのインディヘニスモの特徴は次のように要約できよう。

- (A) シエラの封建制におけるガモナル－原住民を軸に原住民問題をとらえる。
- (B) 社会主義的変革によってその解決を図る。
- (C) 社会主義の基礎および変革の主体を原住民共同体に求める。

#### Ⅳ. むすびに——地域的インディヘニスモからペルーインディヘニスモへ

同じ1909年にリマで原住民擁護協会が生れ、クスコで大学改革ののろしが上ったのは単なる偶然ではない。当時、相前後してリマを中心に労働組合運動が台頭し、アナーキズム、マルクス主義などの政治思想が流入し始め、「人民が政治舞台において、決定の行為者として出現した」<sup>(78)</sup>。この一連の現象はペルーにおける社会経済的構造変化への民衆の先駆的な対応であった。当時のインディヘニスモは近代化あるいは自由主義の名のもとに旧体制、ガモナル体制への闘いとして存在理由をもちえた。このインディヘニスモの潮流は、クスコ大学の近代化、20年憲法の成立にみられるように官製インディヘニスモに吸収され、近代化思想そのものが体制のイデオロギーへと化していくのである。20年代のインディヘニスモは「近代化」の内容そのものをめぐる展開された。したがって、資本主義、帝国主義と向かい合い、その変革プログラムのなかに定立されてはじめてインディヘニスモが存在理由をもちえるのである。この意味で理想主義的インディヘニスモが成立していく余地はなく、インディヘニスモ自体、強く政治性をもつこととなった。この時点で地域的インディヘニスモが合流して、ペルーインディヘニスモを形成していく。このことは上からの政治的、経済的統合政策への「下からの対応」でもあった。

リマ派とクスコ派の交流の象徴的な出来事として、アヤのインカ文明とのクスコにおける出会い(1920年)、およびマリアテギとバルカルセルの交流(1924年以後マリアテギの死まで)があげられる。1920年、クスコにおける学生会議に議長として出席したアヤは、クスコの会議からペルー青年の新しいインスピレーション、つまり人民大学構想、社会問題への関心、原住民運動への傾斜が生れた<sup>(79)</sup>、と記している。また、バルカルセルとの交流はマリアテギのインディヘニスモを理解するうえできわめて重要である。原住民問題に関して通説となっているマリアテギ批判は、シエラの現実を知らないこと、あるいは欧化主義者 *européisant* というものである。サンチェス Luis Alberto Sánchez の

マリアテギ批判もこれらの点を問題にしている<sup>(80)</sup>。しかし、バルカルセルはマリアテギとの交流を次のように語っている。

「これらの対話において、わたしのクスコ・シエラにおける30年以上の生活から蓄積された体験を彼に知らせたのである。この地域を知らない(no conocer)にもかかわらず、彼はその驚くべき直感により、共同体の重要性と、その破壊が原住民を小農あるいは自由賃金労働者に変えるどころか所有地をガモナルおよびその代理人に引き渡すに等しいということを理解した」<sup>(81)</sup>。

この二人の巨人の交流において、理論(社会主義)と現実(原住民問題)の、クスコ派とリマ派の結合によるペルーインディヘニスモの中核が形成されたといえよう。

#### 注

- (1) José Carlos Mariátegui, “El problema primario del Perú,” en *Colección Obras Completas* (C. O. C) 11 (Lima: Amauta, 1972), p. 30.
- (2) マリアテギの言う “el conflicto y el contraste entre su predominio demográfico y su servidumbre” J. C. Mariátegui, “El indigenismo en la literatura nacional II,” en *La polémica del indigenismo*, ed. Manuel Aguézolo Castro (Lima: Mosca Azul Ed., 1976), p. 36.
- (3) George Kubler, *The Indian Caste of Peru, 1795-1940* (Westport. Connecticut: Greenwood Press, 1973), p. 37.
- (4) 「大部分が純血の原住民からなる大量の人口がアンデス高地地域に居住する」Dunn, *op. cit.*, p. 19.
- (5) 「ラティフンディオの廃棄なくしては原住民を抑圧する農奴制の廃棄はありえない」J. C. Mariátegui, *Siete ensayos de interpretación de la realidad peruana*, [C. O. C. 2] (Lima: Amauta, 1968), p. 51.
- (6) 社会経済的にはマリアテギが「シエラにおいては『征服』によって生まれた封建的経済体制のもとで、原住民の共産制経済の残滓が存在している。コスタにおいては、封建制の土壌のうえにブルジョア経済が発展している」と定式化した。 *Ibid.*, p. 28.
- (7) この点を含めてインディヘニスモ全般について天理大学上谷博教授から多くの示唆を受けた。記して感謝したい。
- (8) クスコ派・学派(escuela cuzqueña)という用語は一般化しているが、これにならえばリマ派、プノ派という潮流が考えられる。
- (9) プノ、リマを中心に原住民擁護活動を展開し、とくにプノのウァカネ共同体の闘争を支援した。1867年『Los indios en el Perú』という小文を書いて、そのなかで内陸

- の住民が十分な権利を享受せず、宗教・政治当局の悪業にさらされていると指摘し、各々の福音と正義の遂行を呼びかけ、原住民反乱の可能性を警告している。Juan Bustamante, “Los indios en el Perú,” en *El pensamiento indigenista*, ed. José Tamayo Herrera (Lima: Mosca Azul Ed., 1981), pp. 21–29.
- (10) Diego Meseguer Illan, *José Carlos Mariátegui y su pensamiento revolucionario* (Lima: Instituto de Estudios Peruanos [IEP], 1974), p. 40.
- (11) Manuel González Prada, *Horas de lucha* (Lima: Ed. Peisa, 1975), p. 228.
- (12) *Ibid.*, p. 234.
- (13) M. González Prada, “Discurso en el Politeama,” en *Ensayos escogidos* (Lima: Ed. Universo, 1970), p. 24.
- (14) 原田金一郎「ペルーにおける共同体と社会主義」『インパクト』No. 5, 1980年3月) 100 ページ。
- (15) Wilfredo Kapsoli, *El pensamiento de la Asociación Pro-Indígena* (Cusco: Centro Las Casas, 1980), pp. 9, 23.
- (16) Cf. Jorge Basadre, *Historia de la República del Perú, Tomo XII* (Lima: Ed. Universitaria, 1968), p. 188. Thomas M. Davies, Jr., *Indian Integration in Peru* (Lincoln: Univ. of Nebraska Press, 1974), p. 55.
- (17) たとえば、クスコ代表として Luis Felipe Aguilar, Luis E. Valcárcel, アコマヨ代表として José Angel Escalante の名がみられる。Kapsoli, *op. cit.*, pp. 10–11.
- (18) *Ibid.*, p. 25.
- (19) Basadre, *op. cit.*, p. 189.
- (20) J. C. Mariátegui, “Aspecto del problema indígena,” en *C. O. C. 11, op. cit.*, pp. 104–107.
- (21) José Tamayo Herrera, *Historia social del Cuzco republicano* (Lima: Industrialgráfica, 1978), pp. 70–71.
- (22) Luis E. Valcárcel, *Memorias* (Lima: IEP, 1981), p. 136.
- (23) 政府が公教育再編のため招聘したバード Harry E. Bard を団長とする使節団に随行。
- (24) Valcárcel, *op. cit.*, p. 139.
- (25) *Ibid.*, p. 141.
- (26) J. Tamayo Herrera, *Historia del indigenismo cuzqueño: siglos XVI–XX* (Lima: Instituto Nacional de Cultura, 1980), p. 180.
- (27) タマヨ・エレラはクスコ派インディヘニスモの展開を次のように時期区分している。① 先行期—1897～1909年。② 地域的インディヘニスモ—1909～20年。③ クスコ派インディヘニスモの全国的拡大—1920～31年。④ 亜流インディヘニスモ—1931～48年。⑤ ネオインディヘニスモ—1948年～現在。 *Ibid.*, p. 163.
- (28) *Ibid.*, p. 248.
- (29) “El Proceso del Gamonalismo,” Año I, No. 1, p. 2, *Amauta*, Año II, No. 5, enero

de 1927.

- (30) Tamayo Herrera, *Historia del...*, p. 251.
- (31) *Ibid.*
- (32) Marfil Francke Ballve, "El movimiento indigenista en el Cuzco (1910-1930)," en *Indigenismo, clases sociales y problema nacional* (Lima: Ed. CELATS, n. d.), p. 143.
- (33) J. C. Mariátegui, "La nueva cruzada Pró-Indígena," "El Proceso...", p. 1.
- (34) Francke Ballve, "El movimiento indigenista...", p. 145.
- (35) このアブラ細胞から 1927 年 8 月, グティエレス Julio G. Gutiérrez を中心に共産主義運動の核が生れ, 1928 年初頭「アンデ・グループ」「コスコ」グループの 11 人によって構成されるペルー最初の共産主義組織が誕生した. Tamayo Herrera, *Historia social...*, p. 165.
- (36) Francke Ballve, "El movimiento indigenista...", pp. 152-155.
- (37) *Ibid.*, p. 158.
- (38) *Ibid.*, pp. 145-146.
- (39) *Ibid.*, p. 148.
- (40) *Ibid.*, p. 121. ただしフランケはプノには大学がなく, プノ派の形成に至らなかったとしている. *Ibid.*
- (41) レギア政権の性格については, 拙稿「1920 年代ペルーにおける中間階級——マリアテグーアヤ論争にみる中間階級の位置づけ——」(上智大学イベロアメリカ研究所編『ラテンアメリカの中間階級』上智大学イベロアメリカ研究所, 1982 年)参照.
- (42) François Chevalier, "Official Indigenismo in Peru in 1920: Origins, Significance, and Socioeconomic Scope," in *Race and Class in Latin America*, ed. Magnus Mörner (N. Y. & London: Columbia Univ. Press, 1970).
- (43) J. Basadre, *Historia.....Tomo XIII*, p. 46.
- (44) Mariano Valderrama y Augusta Alfajeme, "Viejas y nuevas fracciones dominantes frente al problema indígena (1900-1930)," en *Indigenismo, clases sociales.....*, p. 99.
- (45) ゴンサレス・ブラダの弟子で, レギアの従弟であるレギア・イ・マルティネス Germán Leguía y Martínez を中心にレギア派左派を形成する. 彼の名前をとってヘルマン派 *germancista* と呼ばれ, 雑誌『ヘルミナル *Germinal*』を発刊する. 他にエンシナス(プノ出身), コシオ(クスコ出身)がいる. 彼らがレギア政権の原住民政政策を推進したが, 1923 年レギア再選に反対したヘルマン派は逮捕あるいは追放された. カストロ・ポソはペルー社会党の結成に参画している.
- (46) 18~21 歳および 50~60 歳は年 6 日, 22~49 歳は年 12 日, 聖職者および特定の外国人は除外された. 代理人を送ることができ, 全国民は通帳を携帯した.
- (47) J. C. Mariátegui, "El problema de las razas en la América Latina," en *Ideología y política*, [C. O. C. 13] (Lima: Amauta, 1974), p. 36.
- (48) Manuel Burga y Alberto Flores Galindo, *Apogeo y crisis de la República Aristocrá-*

- tica: Oligarquía, aprismo y comunismo en el Perú 1895-1932* (Lima: Ed. "Rickchay Perú," (1979), p. 133.
- (49) Basadre, *Historia……Tomo XIII*, p. 308.
- (50) Davies, Jr., *op. cit.*, p. 82.
- (51) Mariátegui, *Siete ensayos…*, pp. 103-104.
- (52) Basadre, *Historia…Tomo XIII*, p. 257.
- (53) Valderrama y Alfajeme, *op. cit.*, p. 91.
- (54) コスタ北部とアプリスモの関係については、拙稿「ペルーにおける従属的發展の過程——トルヒージョ糖業とアプリスモ——」(『歴史学研究』No. 466, 1979年3月)参照。
- (55) Víctor Raúl Haya de la Torre, "Teoría y táctica del aprismo," en *Obras Completas [O. C.] Tomo 1* (Lima: Ed. Juan Mejía Baca, 1977), pp. 181-191. 要約は原田, 前掲論文, 101 ページ参照。
- (56) Haya, *op. cit.*, p. 187.
- (57) *Ibid.*, p. 190.
- (58) 原田, 前掲論文, 101-102 ページ。
- (59) 同上論文, 102 ページ。
- (60) Haya, "Política aprista," en *O. C. Tomo 5*, pp. 7-29.
- (61) ただし要約は拙稿『ペルー近代化過程におけるアブラの成立およびその展開』(上智大学イペロアメリカ研究所, 1975年)32 ページからの引用。
- (62) Haya, "Política…," pp. 23-24.
- (63) Mariátegui, *Siete ensayos…*, pp. 35-49.
- (64) マリアテギは直接ふれていないが、次のような潮流が各アプローチに相当するであろう。① レギア政権内の官界インディヘニスタ, エンシアスをはじめとするヘルマン派。②④ 白人移民による混血化およびカトリックによる教化を説くリバ・アグエロ José de la Riva Agüero, ベラウンデ Víctor Andrés Belaúnde などの未来派 Futurista。③ 原住民擁護協会, 原住民再興グループ。⑤ コカ・アルコール中毒, 文盲に対し, 教育をつうじて啓蒙していく近代化論者, ビヤラン Manuel Vicente Villarán, ベラウンデなど。
- (65) Mariátegui, "El problema de las razas…," p. 42.
- (66) *Ibid.*, p. 25.
- (67) *Ibid.*, p. 42.
- (68) Cf. Mariátegui, *Siete ensayos…*, pp. 13-34. Mariátegui, "Punto de vista anti-imperialista," en *Ideología…*, pp. 87-95.
- (69) 「明らかに帝国主義的資本主義は封建階級の権力を利用している…しかし, 両者の経済的利害は同一ではない」*Ibid.*, p. 92.
- (70) Mariátegui "El problema de las razas…," p. 43. 原田, 前掲論文, 111 ページに詳

しい紹介がある。

- (71) Mariátegui, “Punto de vista…,” p. 93.
- (72) Mariátegui, “El problema de las razas…,” pp. 42–43.
- (73) マリアテギはバルカルセルの著書『アンデスの嵐』への序文において次のように述べている。「もっとも発達し調和のとれた共産制をうちたてたインカ族が、どうしてただひとり世界の律動に無感覚でおれようか。原住民運動と世界の革命的潮流との血縁関係は、あまりにも明らかでありあえて論証するにはおよばない。わたしがすでに述べたように、わたしは社会主義をつうじてはじめて原住民を理解し、正当に評価することができた。バルカルセルは、わたしのこの個人的信念の正しさを証明している」。Mariátegui, “Prólogo,” en *Tempestad en los Andes* (Lima: Colección Autores Peruanos, 1972), pp. 11–12.
- (74) マリアテギは「土地問題」の(注)22においてカストロ・ポソの『Nuestra comunidad indígena』を引用している。(共同体農民が農耕でみせる「活力、ねばり、意欲は、ヤナコン[アセンダの小作農]たちが同一あるいは同じ性格の仕事にたいして労働を提供するときに見せる怠惰、無関心、無気力、それとわかる疲労と比較すると、根本的かつ決定的な相違をなす」Mariátegui, *Siete ensayos…*,” p. 87.
- (75) アリコーは『共産党宣言』の「1882年ロシア語版への序文」について「マリアテギがこのテキストを読んでいたのはほぼ確実である」としている。José Aricó, “Mariátegui y los orígenes del marxismo latinoamericano,” *Socialismo y Participación*, No. 5(dic. 1978), p. 26. ちなみにこの序文は次の有名な章句で結ばれている。「もしロシア革命が西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命への合図となり、その結果両者がたがいに補いあうならば、現在のロシアの土地共有制は、共産主義的發展の出発点として役立つことができる」。マルクス、エンゲルス『共産党宣言』(岩波文庫、1980年)14ページ。
- (76) Mariátegui, “Aspecto del…,” p. 105.
- (77) Mariátegui, “El problema de las razas,” p. 68.
- (78) Basadre, *Historia…*, Tomo XII, p. 214.
- (79) Haya, “Del Cuzco salió el nuevo verbo y saldrá la nueva acción,” *O. C. Tomo 2*, p. 57. 同行したバサドレはその衝撃を次のように語っている。「クスコの威厳、それを取り囲む風景の輝き、真の帝国の伝統の足跡をはじめて眼のあたりにした印象は、一つの世界の発見であった…当時リマにおいて無視され、軽蔑されていた原住民世界の思いがけない発見」Basadre, *La vida y la historia* (Lima: Fondo del Libro del Banco Industrial del Perú, 1975), p. 154.
- (80) 1927年、アブラ派の思想家サンチェスとマリアテギの間にインディヘニスモ論争が闘わされた。この論争は、アルブハル Enrique López Albújar の『*Sobre la psicología del indio*』(1926年)、とエスカランテ José Angel Escalante の『*Nosotros los indios…*』(1927年)が発端となって『ムンディアル Mundial』紙と『アマウタ』誌を

舞台に 1927 年 2 月 18 日から 3 月 11 日まで計 8 回にわたり、両者の間で論争がなされた。クスコ選出のレギア派下院議員のエスカランテは、リマのインディヘニスタの主張を現状を知らないステレオタイプと批判し、レギアの原住民政策を擁護した。これを受けてサンチェスは主に次の点からマリアテギをはじめとするリマのインディヘニスタを批判した。・コスター・シエラ二元論、共同体の理想化、コスタのガモナル、チョコロの無視、マリアテギの欧化主義、『アマウタ』の折衷主義。マリアテギはすべてにわたって反論し、その立場を観客 *espectador* と闘技者 *agonista* に比し、社会主義を明確に打ち出している。Manuel Aquézolo Castro(ed.), *La polémica...*。この論争は原住民問題へのアプローチの姿勢に関わるもので、マルサルは次のような評価を下している。「彼らの原住民に関する思想よりも論争している著者の人格やイデオロギーにより多く言及されている」。Manuel Marzal, "El problema indígena en Toledano y Mariátegui," *Socialismo y Participación*, No. 11 (Sep. 1980), p. 215。しかしこの論争はマリアテギにとりアプリスモから確固たる社会主義への重要な分岐点となっている。

(8) Valcárcel, *op. cit.*, p. 240.